

## 詩五首：文苑

著者	?板, 勝美, 隈本, 繁吉, 淺川, 雄太郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	12
ページ	33-34
発行年	1892-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/3960">http://hdl.handle.net/2298/3960</a>

唯足下諒察焉。不宣。

志識之高卓。文辭之暢達。當今學徒中所罕覩。若能堅守而不變。則天下之事。何爲而不成。切望切望。

乙酉二月廿二日

篁村島田禮妄評

不計功利。而求道義。今世實不見其類。轉將成之業。舍垂獲之利。吾兄之求道。信々

文衝口而出。波瀾意度自備。有得於心者。不求乎文。而文自至如此。

乙酉二月盡

海南藤野啓拜讀

菅公謫所圖

硯友會員 黑板勝美

天拜山頭月色明。觀音寺裏鐘聲清。微吟此夕和君德。誰識滿庭風露情。

又

同 隈本繁吉

藤蔓蔽空天色昏。飛梅却慨當年冤。御衣幸有餘香在。微忠捧持拜聖恩。

採葦

同 淺川雄太郎

路入疎林踏綠苔。樹陰深處有芳埃。一籃松菌香風動。双袖行載秋氣來。

又

同 隈本繁吉

紅葉白雲到處同。林間一路認香風。葦兮似學文章法。新意却生腐敗中。

秋夜懷鄉

同 同

夜色沈々霜路稠、枕頭漏影月光幽、魂飛故國夢難結、哀雁橫空萬里秋、

紅葉深

硯友會員 下 村 光

暮れて行く秋といつおも淋しきに獨り色ます峯の紅葉

同

同 黑板勝美

紅葉の色こき庭はときはなる松にも秋の色はそめつゝ

月下擣衣

同 下 村 光

打わひて月やなかむる小夜ふけて賤かきぬたの音をたゆめる

同

同 吉田 豊

すみわたる月の夜なくひゝくなり里の少女か衣うつこゑ  
たかためか衣してうつ聲すらん月もすみゆく秋の夜すから

平忠度

同 下 村 光

數鳴の道をは花にのこしおきて身を浦風よちらしつるかな